



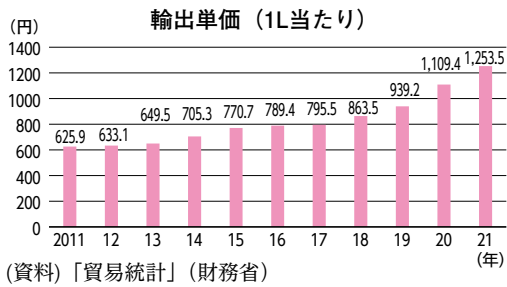
日本酒

▼輸出量・金額ともに過去最高に

2021年の日本酒の輸出量は3万2052千リットル（対前年47・3%増）と3年ぶりに増加し、過去最高となった。また、輸出金額は401億7800万円（同66・4%増）と12年連続で過去最高を更新した。これは米国、中国、香港などで経済活動が回復し、営業再開した日本食レストランにおいて日本酒の注文が増加したことなどによる。

国・地域別に輸出金額をみると、中国が102億7900万円（同77・5%増）、米国が95億9100万円（同89・2%増）、香港が93億7000万円（同50・7%増）となっており、これら3位までの合計で72・6%を占めている。

1リットル当たりの単価の上昇をみると、2011年の625・9円が、21年には1253・5円と倍増している。特に19～20年にかけて輸出量は減少し



たが、単価の上昇により輸出金額は増加した。冷蔵輸送が普及し、大吟醸や純米などが品質を保持したまま配達可能となったことや、海外で日本酒のイメージが刷新され、高級酒として受け入れる市場が形成されたことも単価の上昇に寄与している。

真珠

▼オンラインを活用した国際真珠交換会を開催

アコヤガイの稚貝の大量死が2019年から3年連続で発生したことから、ここ数年は生産量減少に伴う卸価格の上昇が続いている。また、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、主力の輸出経路地である香港で開催される展示会も20年3月以降中止や規模縮小が相次ぐなど、真珠業界を取り巻く環境は厳しい状況が続いている。

このような中、国内外の有力バイヤー向けに神戸が国際的な真珠取引拠点として有望であることPRするとともに、真珠関連業者の商機拡大を図るため、オンラインとリアル展示双方によるハイブリット形式の「国際真珠交換会」を22年3月に神戸市、日本真珠輸出組合、日本貿易振興機構（JETRO）が共催で開催した。

61社から552点が出品され、海外6カ国15社、国内63社のバイヤーが参加したほか、海外12カ国30人のバイヤーを招待した。商品の写真を2枚ずつクラウド上で共有し、さらに詳しい情報を求められた場合は、会場にいるコンシェルジュによってバイヤーの希望に沿った写真を送る等の対応がとられた。出品社の7割が応札を受け、3日間で153点（総出品数の27・7%）、1億1700万円（うち海外70%、国内30%）が落札される結果となった。今後は、コロナ下に象徴されるようなりモートによる取引機会の拡大を図るべく改善を重ねていく。

鎖

▼姫路城の釘が鎖の始まり

鎖産業は、姫路市白浜町および周辺が産地である。その歴史は江戸時代に姫路城の築城に必要な釘（松原釘）を火造りで造ったのが始まりで、明治時代には船釘も製造するようになった。大正5年には、大阪から鍛造による鎖の製造が伝わって鎖製造が盛んになり、その後二度の世界大戦による需要増大を受け、産業として発展し鎖メーカーが集積する国内最大の産地となった。

第二次世界大戦中の昭和15年頃、電気溶接機（アプセットバット）による機械製法が開発され、量産が可能となった。そして昭和32年に外国製の大型溶接機（フラッシュバット）が導入され、大型化、量産化、高品質化が可能となり、地場産業としての基盤が確立された。

鎖には、建設現場の足場、漁具、遊具、ドアなどに使うもののほか、船の錨鎖や海洋構造物を係留する海洋チェーンのような直径が150mmの大きいものから装飾用に使われる直径0・8mmの小さなものまである。

当地には、海洋チェーンを得意とするメーカーがあり、直径132mm、リンク一つの重さ200kgつなげた長さは700mにも及ぶ巨大な鎖を製造している。このような巨大な鎖を造ることができ国内唯一の企業として知られている。